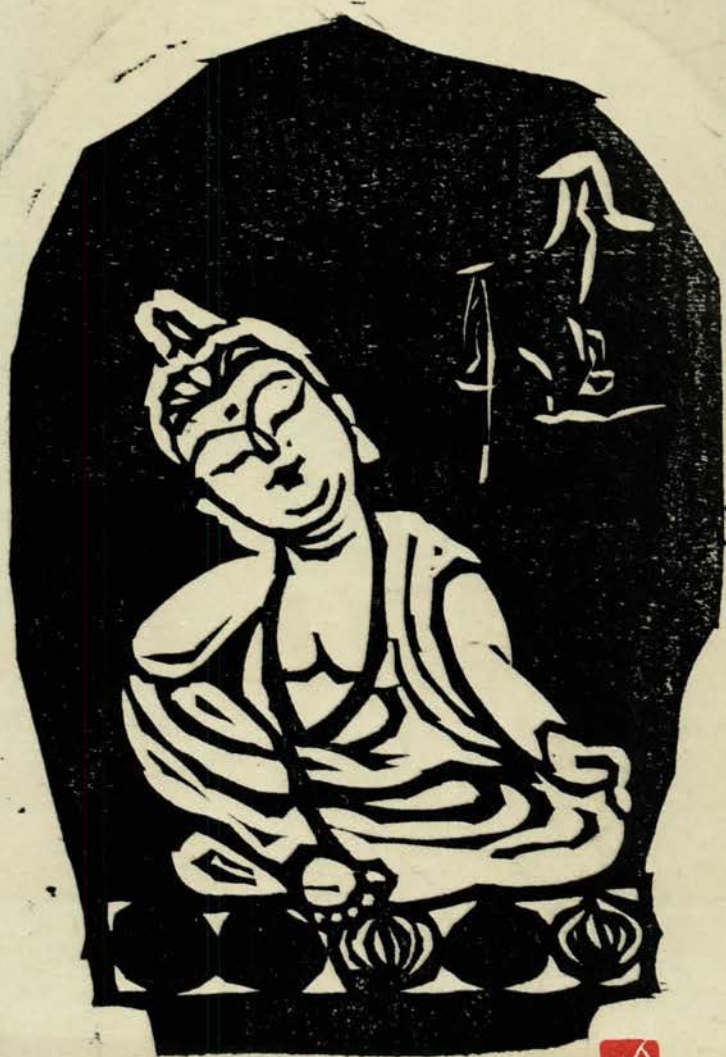


淨土

1984—2

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 再録省（特別授承認雜誌）第三二五号
昭和五十九年一月二十五日印刷 昭和五十九年二月一日発行
第五十卷
二月号



小林



涅槃仏十年床伏す祖母想う

祖母が世にあった頃の拙句であるから、もう十五年も前に詠んだものである。

私の祖母は、七十歳の声を聞くともまなく寝たきりの生活になってしまったので、八十一歳で亡くなるまでのほぼ十年の余を寢床の中で過ごしたことになる。母や妹と、それに父までも協力して共々に看病したことが、今はとてもなつかしい。大声を出し合った喧嘩騒ぎなども、むしろ楽しい思い出にも感じられるこの頃である。

祖母は常に床の中であって、寝疲れからくるものろの痛みや苦しみをじっと我慢してよく耐えていた。一月二月、一年二年と次第に老いと病いを重ね、身体も小さく丸まって、序々に弱りながら幼児化して行ったが、私たちのことはよく理解していたようであった。寝たきりであったが、忍

耐強い祖母の老病の生命は、私の家においてはまさしく大変に大きな存在であった。そのことは、祖母が亡くなった後の淋しさとやるせなさ、私たちの心に悲しい衝撃として今にも残っているからである。祖母をなつかしむたびに、父や母への孝養をいよいよ尽さねばと思う。

表掲の拙句は、俳句としては鑑賞に耐えがたい愚作であるが、私にとっては祖母の長い間の蒲団の中の寝姿と共にいつも心に刻まれているものである。ある大寺のお堂に安置された涅槃仏に手を合わせた時、家の奥座敷にじっと伏せている祖母、"おばあちゃん"のことを想ったのである。釈尊仏陀の涅槃の様に接して、私には祖母の寝姿が寝釈迦の尊容にも似て、麗わしく想えたのである。

その年、昭和四十四年春彼岸のお中日、三月二十一日に祖母は安らかに永眠したのである。

(勝崎裕彦)

二月号



願くは我が功慧（くえ）の力、此
の最勝尊に等しからん。

——『無量寿経』四誓偈

目次

法 話

- ねはん会を迎えて……………村 上 博 了……(2)
ねはんのすすめ……………遠 田 弘 俊……(7)

《世相評談》

- 如月無我……………須 藤 隆 仙……(12)
子年史談……………細 田 隆 善……(24)
法然上人を語る……………津 村 諦 堂 ……(18)

(涅槃)(會)(隨)(想)

- 釈尊の「最後の旅」に思うこと……………坂 野 泰 巨……(30)
エッセイ 引き揚げ船「江の島丸」……………木 下 隆 一……(42)

寄 稿 執 着

- ……………吉 田 勇之助……(38)
浄土句集……………一 田 牛 畝 遅……(40)

<表紙裏>一月一句「涅槃仏十年床伏す祖母想う」

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

ねはん会を迎えて



村上博了

(茨城県境町専修寺住職)

一

二月十五日ねはん（涅槃）会である。地方により三月十五日に行うところもあり、仏忌又はねはん忌とも云う。仏教三大祝日の一つで、大聖釈尊入ねはんのみ教えを示し下さった

た我々が仏性育成のよき勝因である。

各宗寺院は、ねはんまんだらを本堂にかけたり、涅槃像があれば荘厳し、香花靈膳供物を供え、涅槃講式なり別時念仏会を修行し、若しも我らにお迎えあらば、誰もが安らかに「ねはん」の境に入りたいと願求する。

我国には重要文化財以上のねはんまんだらが、現在三十七幅あり、いづれも貴重な文化財である。ねはん会に参詣、まんだらに結縁をすれば、自然と仏性開花、善心と生甲斐を喚起する。

大本山増上寺に大ねはんまんだらがある。神君徳川家康ゆかりの伊勢国阿濃津城主夫人清雲院発願、増上寺(浄土宗)中興源誓存応上人普光観智国師ご指導、狩野隼人佐が画き、元和十年完成、二月十五日開眼供養された大幅である。京都兆殿司のものが従来日本一的大幅と云われたが、増上寺まんだらは更に大きい紙本着色、表装は画き表装であり、画は蓮花、東西教界双壁の霊宝である。

二

ねはんまんだらは、国宝因果経による。古い作品は、サラ双樹が老若であり形が自由に画かれている。武家時代になってからは、八本のサラ双樹が揃って木振りが美事で、五色

の雲も大き目となり、中天の満月も更に大きくニレン禅河(恒河)の流れ、波頭も清冽だ。

私は調査中に、増上寺大幅の下段水牛の鼻先に、猫が画かれていることに気付いた。猫は、まんだらに画かれていないと云われていたから、縁山はじめ数誌に発表したところ、大変な反響となり、識者や文化人の来訪が多数。特に女子大教授中村恵子先生がまたの文化人と来寺あり、「ねはんまんだらに猫がいるとは珍しい初耳である。是非とも拝みたい」と要望されたので紹介する。

同伴の人々は目を丸くして、「猫が、釈尊のねはん間に合わないで、昔から魔ものと云うが」と話しあっていた。これから、増上寺ねはんまんだらが有名になり、あまたの参詣者がある。

増上寺一山坊中の名利に天光院がある。増上寺十一世円也上人の開山寺院である。上人は感誓流祖で増上寺十世感誓上人門下の大法器、選ばれて、永禄九年十月四日増上寺十一

世に住職、天正十年十一月火災により山内焼失隠居、翌年八月天光院を開き閑居、これより先五月二日存心上人、増上寺十二世貫主となる。相州大長寺法系に従って、円也上人、存心上人共に師弟の間柄で親密であった。

同院は、家康婦依観智国師の真影を伝承由緒寺院であるが、同院所蔵ねはんまんだらに、黒猫が描かれている。円也上人と国師の暖かい愛護のやさしさが強く胸を打つ。

仏教は平等であり、如来の大慈悲(光明)は月影のように公平で区別がない。

浄土宗祖念仏元祖円光・和順大師法然上人は、称名念仏は阿弥陀如来のご本願、となれば、その功力は平等大利益と専修念仏の浄土宗を開立されている。唱うれば老若男女の区別、仮令動物とてわけへだてがない。お念仏の功德は宏大である。

国師が伝承の宗意安心をむずかしい伝語や遺誠とせず「ねはんまんだら」を通して、猫で現わした配意に、大高僧の面目躍如とした

一面は有難い。

三

まんだらは、中央しとね上に、大聖釈尊がねはんの頭北(北頭)西面の態で休まれる。北頭は光線を軽くうける。お顔の西向きは、すこしも早く西方極楽来迎の阿弥陀三尊と二十五ぼさつの迎接を拝むためである。又、体の左を上とすると心臓が上になり呼吸がらくになる。

現在も大聖釈尊にあやかっ、誰も頭北面西の姿をとる。床上の釈尊を囲んで、天神地人夜叉鬼三宝荒神と諸弟子達が、「父を失う」「光りを失う」と悲嘆にくれ、五十二類の我ら身近な動物達も大悲泣する。特に阿難尊者が悲嘆の姿は、今ねはんを示して、我らが胸を打つ。

上部の満月は十五夜と同時に、これから欠ける教え、恒河の流れは、行きて再び帰らざる人生無常の姿を示し、人生は「時を活かせ」

「精進であれ」と教え下さる。

サラ双樹八本の中四本が枯れることは、大聖釈尊ねはんと同時に、四恩の教えを示し給う。(1)父母の恩、(2)社会の恩、(3)国土の恩、(4)三宝の恩を生活の基盤とし、毎日「おかげさま」と、お返し的心を忘れないよう教え下さる。宇野千代先生が八十五年の生涯をかえり見て、ご恩を忘れない生活は不滅の生活指針と述懐されている。

江戸時代になってから、まんだら右手上部に、貴夫人が数人のお伴をつれ雲にのって急ぎ来迎の様子が描かれ、案内の僧が夫人に何かを告げている。諸説がある。

(一) 我が子釈尊ねはんと知り、急ぎお迎えに、おいでの状況と云う、私の所のねはんまんだらは、増上寺まんだらより多少年代は下る。時代に福王盛勝雪峯作品で入念丁寧に描かれている。大きな増上本まんだらの四分の一で、長さ二米六十五、幅一米七十八、紙本着色、

マヤ夫人来迎が描かれている。

大聖釈尊のような不出世の大哲人であり、仏教の元祖とても、父母より見る時には、いとし我が子である。極楽世界の浄飯王夫妻とて、つねに、わが子の健康と幸福を忘れる時はない。ねはんと聞いて、とるものもとあえず急ぎお迎え下さる、有難いことではないか。父母と子供の、このやさしさは現代我らとても少しも変らない。又ご先祖さまも同様、つねにわが子達をお守り下さっている。

(二) 浄飯王夫妻、我が子釈尊ねはんとときいて、必ず全快すると云う妙薬を如来からいただき、我が子に届けたいと雲をとばして、クシナの森へと急がれたが、どうも雲足おそいと、錦の袋に収めた妙薬をとばした処、サラ双樹の枝にかかって、釈尊の手許に届かないで、臨終。その一証として錦の袋がサラ双樹にかかった。誰も定命であっては致し方がないとする説。

いずれにしても、父母と子供の親縁さは、三千年昔も今も変わらない。父母はいつも御守り下さっている。従ってその慈悲に応えるよう、現在はお返し運動をつねに忘れず毎日精進し、努力と工夫のあるところに悦びが生れる。そうして父母によく仕える。孝行は成功への第一歩であり、幸福への過程と教え給う。

四

釈尊、ねはんに当り、西面したまうことは、阿弥陀経に六方淨土を説き給えるも、凡夫往生は西方極楽である。称名念仏こそ、ご安心確立への近道と教えて下さる。

その御心を宗祖大師法然上人は一紙小消息に、

十方に淨土多けれど西方を願うは、十惡五逆の衆生の生るる故なり。諸仏の中に弥陀に帰し奉るは、三念五念に至るまで、自ら来迎し給う故なり。諸行の中に念仏を用う

るは、彼仏の本願なる故なり。今弥陀の本願に乗じて往生しなんに、願として成ぜずといふことあるべからず云々
と説き給う。そうして、

本願に生ずることは、信心の深きによるべし

とあるみ教えを味わい、仏性を育てるよう菩提心を起し、如来のご本願念仏を常に唱え生業につとめ一隅を照らす毎日でありたい。

大聖釈尊ねはんに、お体だけの姿は、いざと云う時、七珍万宝や妻子眷属多いとて身一で極楽へ旅立つばかりである。毎日お念仏を申して功德をつみ、如来の来迎を得たい。私の尊敬する浄正寺多賀谷僧正は十数年前夏遷化せられたが、辞世に、

頭陀袋一つかけたる夏姿

正に七珍万宝財宝も、臨終には何の役にもたたない。お念仏申すこそ真実の法宝であり、如来の来迎を賜う。いざねはんを思い、称名念仏につとめたい。

(法)

(話)

ねはんのすすめ



涅槃の月を迎え遠い想い出の彼方に消えようとしている情景を、今まざまざと脳裡に蘇返らせている次第です。私の故郷は越中の国、富山県の礪波といえ、今は北陸バイパスの貫通する文化の流れ滔々と押し寄せているところであります。然し明治の末期、大正の初め頃と言え、まだまだ鄙びた地方であった。

とお
遠 田 弘 俊

(東京・文京区慈眼院住職)

その頃の中央の新聞等の報ずる言葉に「草深い礪波」と書かれているのを読んで、何となく馬鹿にされたように思ったものでした。なる程考えてみれば私の生れた頃には村には電灯もなく、一本のマッチが貴い火の元であったので、母は夜休む前には「いろり」の灰に埋れ火を貯えて、翌朝の火種としていたもの

でした。十一月半ばともなれば、農作業はすべて終りを告げて、若者は旅に出稼ぎに出かけ、老人は縫編み、或いは草鞋作りに冬を越し、雪の多い年は殆んど家外の雪との戦いに明け暮れることであつた。子供達は何をして遊んだか、雪国の生活を今想い起すだけでも感無量です。年明けて正月の声を聞く頃ともなると、細々と踏み固められた雪の野道を網代の鰻頭笠に合羽を纏った旅の尼僧さんが鈴の音を響かせ乍ら、一軒一軒の門に立って、

澄んだ声で、「ねはんのすすめ……」と呼んで来られるのです。子供心にこの庵主さん達は何をすすめて歩いていられるのか判る由もない。その時各家々では、貧富の差別なく必ず幾許かの志を差し上げていたようでした。

吾が家では貧しい乍らも、母はいそいそと米櫃の中から枳で僅かばかりでもすくって差し出すと、胸に掛けた頭陀袋に受けて、「ざいほう二施くどくむりょうだんばらみつ、ぐそくないしほうかい平等利益」と声張り上げ

て称えて、深々と笠を傾けて通られたことが、殊に印象に残り、その時母は必ず手を合せて「御苦労様ですね」と後姿を見送っていたものでした。「ねはんのすすめ」とは何なのか、知る由もなかった。やがて私も仏縁あつて浄土宗の寺へ弟子入りすることとなりました。数え年の九歳の時です。小学校一年の終った期末休暇に新湊町の大楽寺へ入室したのです。浄土宗での行事として正月修正会から始つて、一月二十五日の御忌、二月に入つてます涅槃会です。二月十五日は地方の寺々にとっては欠かすことの出来ないお祭りと申しても過言ではありません。漸く正月気分も薄らいで北陸の雪深い田舎として、二月ともなると愈々涅槃会の仕度が始まるのです。もう此処まで申せば皆さんの中には恐らく思い起されることでありましょう。菩提寺のお寺でお釈迦様の涅槃像の掛け軸を飾って、色とりどりのお団子を盛り上げて法要を勤められていたことを……。

扱而先刻の「ねはんのすすめ」と呼んで托鉢なされていた尼像さん方の脚行の姿は、もう見る事が出来ないかも知れません。然し寒行の間に、ねはんの行事への奨めを身をもって勤めていられた往時のことが泌み泌みと有難く感じられてなりません。この涅槃の行事に五色に彩った団子を供えることについては種々の説話がありましよう。お釈迦様のお舍利(御遺骨)であるということもあって、これを頂いて帰れば一年間の厄払いとなり、簞笥の引出しに入れて置けば、衣類の虫除けとなり、或いは煎じて飲めば子供の虫下しになる等々なかなかの御利益に連なる話も数多あることです。これらも懐しい思い出となります。私も小僧生活から青年期となって生意氣盛りになると、彼の涅槃像を拝んで、一寸した疑問を起したものでした。お釈迦様は御一代お説教なされたお言葉は、すべて生きとし生くるものは必ず滅びなければならぬ、生者の必滅の道理は万古不易の鉄則であり、当然の

理として受け取るべきであり悲しむべきことではない。而も会者定離は世の習いであり、「弟子達よ、吾が亡き後は決して悲しむでない。私の亡き後は私の説いた法を以て私と思ってくれ。法の世にあらん限り私は不滅なのだ」と。恐らく法を聴き覺りを得た多くの弟子達が歡喜踊躍した、と経文に示してあるにかかわらず、何故にこんなにも悲しい表情なのだろうか？　と思索したことだった。今こそ師の仰せの通りであり、師の臨終に会ったことを歡ぶべきではなからうか、と。然し皆様にもこの絵像の現わされている姿を拝されて偉大なる仏陀の最後をつくづく胸に刻まれることでありましよう。お釈迦様がこの世にお出ましになり御一生の姿を、釈迦の八相と申して絵説きの上では既に納得されていることでありますが、何と申しても、成道と涅槃は仏教徒として確かに胸に刻むべきでありましよう。お誕生から涅槃までの八十年の御生涯は、すべて世の人々の為以外の何もので

もなかったのです。私達は年々歳々生あらん限り、涅槃会を迎えて、而も静かに涅槃像の前に坐して、

哭く羅漢吼える獅子あり涅槃像

と、二千五百年前の天地の慟哭を泌み泌と胸に迫る思いで拝せずにはいられない。

今さら申すまでもなく涅槃とは、お釈迦様のお亡くなりになったことに対する言葉として受け取っています。涅槃には既にご理解の事でしようが、有余涅槃と無余涅槃の二通りを上げることが出来ます。私達が生きて行く上であらゆる執着から離れて一切のことに「とらわれ」の心から脱け切ることが出来るならば、それが第一の涅槃の境界だと申すことが出来るわけです。これを有余の涅槃と申して、お釈迦様が百年三十五歳の時、菩提樹の下でおさとりを得られたことを申し上げて、到底我等凡夫の輩ではこの境界に立ち入ることとは出来得ないことであります。お釈迦様は既に第一の涅槃を得られて、以来四十五年間、

第二の涅槃を迎えられるまで、多くの人々の上に仏の道をお説き下されたのでありました。ここで私は静かに自分自身が今日まで歩いた道に、少しでも涅槃に近づいて来たであろうか、勿論第一の涅槃である有余涅槃の門口まででも覗くことが出来たでしょうか。

自ら一切の執着から離脱し得られたか、と自問自答する時、「イエス」と言い切れることは出来ません。必ず一言理由を附けて慾望の上に正当化しようとつとめることでありましよう。これが私達の涅槃への道の遠いことを示しているのです。凡夫の世界、それは慾望の世界だと申しても過言ではありません。この世に生を受けて以来、慾の中に生き、慾と共に歩いて来たこの身が何もかも捨ててしまえと申されても、恐らく「ハイ捨てましよう」とは言い切ることが出来ません。

宗祖大師法然上人のご法語に、「それ速かに生死を離れんと思わば二種の勝法の中に、暫時聖道門をさしおきて、選びて浄土門に入

れ」と仰せになっています。所謂生死を離れるということが「涅槃」に入ることとでありましょう。されば涅槃に入ることの近道は、吾が浄土宗に帰することと申すべきであります。釈尊が三十五歳で「生死解脱」の境界にお入りになり、爾後四十五年間、唯一途に第二の涅槃への道をお説き下されて愈々最後の近づき給うた時、クシナ城外バッドイ河の辺り、沙羅双樹の林の下で、静かに床を延べて、頭北面西のお姿で横たえられたのでした。師の最後の近づき給うたことを知った有情（生あるもすべて）が雲の集る様に群参したのです。まことに貴いことでありました。特に忉利天に在ました御母摩耶夫人がはるばる天上よりお降り遊ばして吾が子の臨終にお会いなさる姿を拝見する時、母の子を想う一念がいかに大きく深いものがあるかを示しているものと拝するのです。まことに師の教えのあるところ師在すなり、という信仰は遠い二千五百年以前の出来事とは思えぬ身近なも

のとして頂くわけであります。

ここで今一度、かの「ねはんのすすめ」と称えて門づけなさっていた往時のことを振り返ってみて、遙かなる「ねはん」への道ですすめて下さったのだと改めて知らされたように思えてなりません。僅かばかりの奉加の志が知らず識らずの間に人の心の窓から離れて、仏の教えに心を傾け、やがて涅槃の近づくことを気付かせていられたことでありましょう。

今私は既に人生の黄昏を迎えて、遠い二千年五百年前、鶴林涅槃の相を現じ給うた大聖世尊の尊像の前に合掌させて頂く時、噫々吾等亦かくありたしと願わずにはいられない。

善導大師の発願文「願くは弟子等」を拝誦して、宗祖大師の仰せの様に、只一向に念佛するより他にいかなる修行の道があるでしょう。有難い浄土の教えの中に今日も亦迎える涅槃の日、南無阿弥陀仏を口ずさみながら、本願の強力を頂き度いことであります。

合掌十念

《世相評談》

如月無我

本稿は「世相評談」とはいふものの、原稿締め切りの関係上、かなり古い話題が登場する結果になり、読者は事件の取り上げ方に時間的ズレを感じられると思うが、ご諒解いただきたい。



須藤隆仙

(函館市称名寺住職)

前号でも折角自殺のことを取り上げたのだが、送稿直後に、京都の禅の名刹の管長が首つり自殺するというショッキングな事件が起き、原稿を送るのを、もう少し遅らせればよかったと後悔した次第である。この件に関し

ては本稿の末尾でふれておきたい。

さて、「いつまでもあると思うな親と金、ないと思うな運と災難」という道歌がある。私はこの歌が大好きである。時折ひとりてこれを口ずさんでいる。いつ思い出してみても、実にいいことをいっていると感心する。

近頃は、昔のことにも非常によいものがある、という考え方が大部世間の表面に出てくるようになった。

終戦直後からこの間までは、まだまだ、昔のことをバカにしていた。昔のことは何でも古くさいもの、遅れているもの、役に立たないもの、といった考えが、大手を振って闊歩していた。「進歩的だ」といわれれば賞(ほ)められたことであり、「保守的だ」といわれれば貶(けな)されたことでさえあった。

これは、昭和二十年に日本が戦争に負けたので、これまでの考え方、やり方はみな間違

っていたとの反省に立ち過ぎたあまり、過去の一切のものを否定するという愚を行った結果であって、どうも日本人というのは、やり過ぎる、傾き過ぎるきらいがあるのである。過去のことなら、たとえ良いことであったも、それを時代遅れと見、あるいは罪惡視さえするような傾向のあることは、決して良いことではない。

物事は、古いものであらうと、新しいものであらうと、感情的にこれを判断するのではなく、理性的に見ていく努力が必要なのである。

最近、とくに面白いと知っていることは、医学・健康の面のことについて、昔の療法が良いとか、昔の生活が良い、などと、それこそリバイバルなことがいわれてきていることである。この間もある健康雑誌に、「昔ながらの習慣に秘められた成人病撃退の驚くべき知恵」という特集が載っていて、〇十時や三時にお茶を飲む習慣は脳の血管をつまりにく

くし脳卒中予防になる、○朝のラジオ体操の習慣は血管の緊張をゆるめ一日中血圧を低く保つ効果が、○正座をする日本人のほうがイスに座る欧米人よりひざの関節病が起きにくい、○日本間の座り机で仕事をすると右脳が刺激され新しいアイデアが湧いてくる、○ときどき下駄をはく習慣は足の指の筋肉を鍛え足腰の老化を強力に防ぐ、○精子の数を正常に保つにはブリーフをやめ、さるまたをはいたほうがいい、○海や山の幸をかたよりなくとる昔ながらの食事はぜんそく発作の予防に有効、○食前にウメ干しを食べると胃液の分泌がぐんと活発になり胃もたれが防げる、○核家族より大家族の人のほうがビタミンの豊富な食事をしていることが判明、○まめに手紙を書く習慣は脳の働きを活性化し物忘れやボケの予防に大変有効、○畳の上に敷いたふとんは背骨や腰に無理な負担をかけない理想的な寝具、○車に乗らずよく歩く山村の人には動脈硬化を防ぐ善玉コレステロールが多

い、などといった興味津々たる記事が紹介されていた。これらは、いかに昔のことにも良いことがあるか、ということの証拠並べのようなものであって、まことに快哉の読み物であった。

話を前に戻して、前出の道歌も、昔の歌ではあるが、平凡なようでいて、どうしてどうして、大変な教訓を含んでいる。まさに真理そのものをズバリといい当てている。

親がいつまでも存在していると思つて甘い考えをもつてはいけぬ。親も自分も刻々に歳をとり、やがては死んでいく。親の意見がうるさいといつてバットで殴り殺した青年がいたが、殴つても殺しても親という存在はいつまでもあるものだといった錯覚がこの青年にはあった。獄中でいくら悔んでみても、一度殺してしまった親は、二度と生き返つてはこない。もし殺していなければ、たとえば怪我をさせただけであれば、たとえそのために刑務所に入つても、出所するのを一ぱ

ん待ちこがれていくくれるのは、その親であらう。しかるにその親はもういない。

別に親は殺さなくとも、われわれにはどうかこの青年と共通する気持をもっている。いつまでも親がいてくれるような錯覚である。親を「いつまでもある」と思っただけはない。金銭についても同じである。まだある。まだどうにかなるといった一つの迷信が、大変な悲劇を生んでいる。サラ金地獄などは最もよい例である。

これに反して、運や災難に対しては、それが金輪際ないような逆の錯覚をもっている。とくに災難についてそれが多い。

最近、そういったある種の精神麻痺といったようなものを見せつけられて、啞然とすることがあまりにも多い。

昨秋、あるサファリ・パークで、ライオンがバスのドアを開けて中から若い女性の車掌を引きずり出した事件があった。幸い一人命はとりとめたが重傷である。このときに他

のバスの運転手がテレビインタビューで答えていた話を聞いて私はあきれた。「そんなことはあり得べきことではないと思っていた」というのである。だからドアをロックしていない運転手が多いのだそうだ。襲われたバスは一応ロックはしていた。だが外にボタンがあつて、それを押すとドアが開くのである。ライオンは半立ちになつてそのボタンを押したのだ。

ネコやイヌを飼つていてもわかることだし、もし飼つてない人でも、動物の生態をちょっと注意して見ていればわかることだが、箱なり囲いなりの中へ、どこから入ったらよいかというのを、動物たちは自力で習得する。頭があまり良くなというニワトリでさえも、長い時間をかけてそこを探し出す。ましてライオンなどは、二匹で獲物をはさみ撃ちにするような頭脳のもち主である。今回はドアですんだが、もっと別な事件が起きないとも限らない。災難が「ない」と思つてはいけ

ない。

世の中には万が一ということがある。つまり絶対ということはあり得ないのだ。その万が一に備えて気づばりをしておくことが必要なのである。

大阪城内で起きた中国の兵馬俑（へいばよう）倒壊事件もそうであった。公衆の群れ集まる中に、高さ九十センチのガラスで囲んで一メートルのさくを立てただけでは、狂人はいつでも壊すことができるではないか。狂人は絶対に入場してこないと思っていたのは錯覚である。確かにそんな人間は何万人中の一人であろうが、その一人のために恐ろしい災害は起こるのである。

この頃の人たちは、万が一ということを忘れ過ぎていた。そこには知らず知らずのうちに心中に育まれた機械文明への盲信がある。

コンピュータにまかせれば何でも出来るという考えは、確かに現代認識があることも事実だが、そのコンピュータはあくまでも人

間が操作するものであり、また、機械という現実社会のものである限り、変調をきたすものである、ということが忘れられているのではないだろうか。

仏教では「無常」と共に「無我」を説く。

無我とは固定不変の状態を否定したものである。ものごとはいつどのように変わっていくか予測できないものであるということを、心底にしっかりと抱え込んでおく必要がある。

だからといって、悪い方面にのみことを想定しては勿論いけない。

前出の歌ではないが運というものの（この場合は良いほうの回り合わせをいっている）存在を否定するのもよくない。先のライオン事件でも、降ってきたような災難ではあったが、そこにまた運というものがあつた。周囲の人たちの機転でこの女性は一命をとり止めた。運もまた「ない」ものではないのである。

二月を如月（きさらぎ）という。ある説ではキサラギは梵語のキサライで、春先の木の芽

立ちの頃をいうのであり、聖武天皇の頃インドからやってきた僧が、日本の冬に閉口して、やや春になって、「キサライキサライ」と喜んだので、それでキサライの語が生まれたとするが、説の当否はともかく、世の中は

寒い冬ばかりではないことを教えて面白い。最後に禪宗の管長さんの自殺の件だが、私は、あれは頭がおかしくなったのだと思っている。ちゃんとした論拠はあるが、今は紙数がない。

(新)

(刊)

『生活の倫理』

著者

大正大学教授

宮林昭彦

B6判 一九四頁 定価二二〇〇円(千二百五〇円)

◎春の章・夏の章・秋の章・冬の章・法の章——五章よりなる宗教的エッセイ。季節感に富んだやさしい滋味深い文章が印象的かつ感動的!!

(発売) 千102 東京都千代田区飯田橋一―二一六

大道社

法然上人を語る

津^つ村^{むら}諦^{たい}堂^{どう}

(秋田県角館町報身寺住職)

(→)

法然は中世日本仏教創始者として多くの歴史学者、仏

教学者の研究対象とされ、その研究論著は極めて多数に上っている。

しかもそれらの学者達の研究は法然⁽¹⁾を従来⁽¹⁾の神秘性から解放し、ありのままの法然像をありのままに描き出し

ている。

然しながらそれらの多くは歴史的研究の域を出でざるものであつて、法然の教学即ち教義の面に於ては一、二の学者を除いては殆んど經典、法語、消息などの訓話と解釈に止っているに過ぎない。

法然像が事實に基いてありのままに描き出されると同時に、教義教学も従来の神秘性を取り去るべきである。

法然の教学が依然として神秘性に覆われているままであるならば、それは時代の精神状況に合わないものに終つてしまふであらう。

法然の教学の擲つて立つ根本理念が時代の精神状況に合わないものであり、神秘性に覆われているならば、それは一つの骨董品としての存在価値しか持たないものになるであらう。ところが法然の教学が過去八百有余年の間人々の心の灯^しびとなり力となつて来た所以は、その教学が深く人々の心の中に存在する根本的要望に応え得るものであつたからであると思われる。然もそれは世俗的恣意的要求に対応するものではなく、飽く迄も人間の根源的な願望、即ち人間苦の超克に立向うものであつたからと考えられる。

ところで法然の教学を単なる訓話解釈を以て終るとするならば、朝廷国家の或は摂関貴侯の繁栄と受福を祈願しようとする咒術に外ならなく、念仏は聖道門教学と何ら扱ふ所なく、念仏は一つの呪文であるとのそしりを免れ得ないであらう。

従つて、歴史学者の努力によつて法然の真実の姿が明示されたとしても、その教学の面が、呪術の域を脱しない限り、よく時代の指導原理たり得ないことは明らかである。

(二)

およそ宗教は如何なる宗教でも、それが成立つ為には確固たる理論的根拠を持たなければならない。しかしながらその根拠が時代の精神状況に合わないものであるならば、それは社会の、人々の指導原理としての存在価値を保持することは困難である。

かつてトーマス・アキナス(一二二五—一二七四)がその教義に於て哲学的内容に乏しく且つ文書の簡素なるに失望し哲学的神の確立に一身を捧げ、その著「独語」「神

の国」に見られる如く教義の哲學的基礎づけに努力し、キリスト教の教義と權威を磐石たらしめた如く、法然の教學も現代人の精神状況に合致するよう哲學的基礎づけを必要とするものと思われる。斯かる意味に於て歴史的の研究に依つて人間法然を浮彫りにすると同時に、教義を哲學的研究によつて現代人に納得行くよう衣替えする必要があると思う。

メシヤの出現とキリストと復活への妄信、金剛不壞の信心による阿彌陀仏への絶対的帰依、或は「宗教は非科學的な思想ではあつても理想社会、地上天国の建設という大きな理想をかかげ、その実現の為に大衆の協力を訴えるものであるから、当然その教えに基く実践を伴わなければならないし大衆思想運動となつて始めて宗教としての面目を發揮するからである」と云うような妄信、信心、非科學的大衆運動を宗教の基底とするものもあるが、これらはやがて時代精神によつて葬り去られなければならない運命を荷っているものである。斯かるものが宗教の名に於て存在すると云うことは、正に現代の神話と云わなければならないし、又かかる宗教の信者はフロイトの精神分析学の対象にされるものである。

宗教は大衆運動でも又政治運動でもない。況んや慾望充足の手段でも絶対ない。仏陀の教説は理想社会、地上天国の建設の為に慾望からの解脱を根本義とする。即ち「一切皆空」の自覚の上に成り立つものであり、人間慾望の対象をすべて「空」とする人間精神の深い内省に基くものである。

法然の教學は正にこの空を基礎とするものであり、般若思想に立つ縁起觀であり、真空妙有思想の表現に外ならないものである。

(三)

しかしながら法然の教説は、少智少見、貧窮困乏、破戒無戒、罪惡深重の下根者をその対象とするものであるから、その内容は、

「念仏申すにはまたまた別の様なし、ただ申せば極楽へむまると知りて、心をいたして申せばまいなり」

「我はこれ烏帽子もきぎる男なり、十惡の法然房、愚痴の法然房が念仏して往生せんといふなり」

「罪の輕重をいはず、ただ念仏だに申せば往生するなり、別の様なし」

とこ法語に見えるように、極めて簡略にして哲學的内容に乏しく、且つ非科學的とさえ思われることも否定し得ない。

更に法然の浄土宗創唱の宣言書とも云われる「選択本願念仏集」にしても、教祖仏陀の方便説たる經典に基づくものであるから、それは方便譬喩の域を脱していないものと思われる。

しかしながら、これらの法然の法語消息は、すべて人間法然が心の中に確信した人間苦超克の実証と確信の時代的表現に外ならないものである。云い得るならば、それは現象面なのである。従って、法然の真意は、かかる現象面の訓詁解釈では把握し得ないものである。即ちかかる現象面を通して、その本質へ立向うべきであると思ふ。

(四)

ところで宗教一般の成立する基礎的原理ともいわれるものは信仰であることは云うまでもない。

何を、どのように、何の為に、はすべて信ずる者の自由に属する。その宗教の教義は信ずる者の精神状況に應え得るものとしてその存在値を有する。

ところが人間の精神状況は時代と環境に應じて変化する。従って、信仰もその時代時代の精神状況の変化に應じて変化する。

この意味で、教義はその時代時代の精神状況に裏づけられた信仰に應ずるものでなければならぬ。

ところで、信仰には従来、

- 一、信仰の主体を神の側に置くもの
- 二、信仰の主体を人間の側に置くもの

の二傾向があった。

前者はSt. Paul (生没年不明) によって代表される、

「人間が神を信ずるに至るのは、活ける神がキリストを通じて罪人であるわれわれに語りかけ救い給うからである」

と云う如く、神の言葉なる啓示とキリストとを結びつけて信仰を考えている他力的立場である。

是に對し後者は、信仰を主観的な宗教体験と同一視し人間側に主体を置く立場であつて、Schleiermacher (一七六八—一八三九) Albrecht Ritschl (一八二一—一八八九)、Rudolf Otto (一八六九—一九三九) Feuerbach (一八〇四—一八七二)などはこの考えに立っている。中でもホイエルバッハは更にこの立場を強調して、

「信仰の対象である神は存在しない、単なる人間の願望の産物である」

と断じている。

前者の場合は神は超越的存在であつて人間の外にある絶対者と考えられ、原罪を持つ人間は只そのような神に

よつて救われる以外道なしとする云わば人間は全く無力、無能者として絶対者に盲目的に依存する立場である。

ところがそのように人間にとって超越的な神或は絶対者と云うものが果して實在するであろうか。Parmenides (B.C. 五四四—五〇一)は、

「理性のみが真理の基準で、それによつて考えられるものは存在するが、考えられないものは存在しない」

と云っているが、この理性をプラトン及び新プラトン学派の Plotinos (二〇四—二六九)の云う、

「真の實在であるアイデアを智的に直観する能力」

と考える限り、又カントの云う如く、

「神は実践理性の要請として在る」

のであるならば第一の根拠はうすいように思われる。更に最近 *Bartrand Russel* (一八六二—) は神の存在に関する多くの証明法を批判して、神の不必要を宣言し、*Th. Ziehen* (一八六二—) が神概念を法則性に置き換えようとするなど第一の立場の実なき信仰から理性に基づく信仰へ云い換えれば、主体性を人間側に置く第二の立場に進みつつあるものと考えられる。

(五)

法然は自己が証得した自証を自己と同じく凡ての人々に証得せしめようとして人々の機根に応じて様々な法語、消息を以て説かれている、それ故に我々が法然の自証内容を理解する為には実証の内奥にひそむ本質を理解しなければならぬ。もし字句に現れた法語、消息を、字句通り解釈し信ずるのでは法然の真意を理解することが出来ないであろう。

法然教学の拠典は仏陀の經典「浄土三部經」に基づき、末法五濁惡世の下智下根罪惡深重の者の為に、易行による浄土往生(成覺)の道を、譬喩を以て示された教説で

ある。

従って、法然教学の正しい理解は、方便譬喩の字句通りの解釈でなく、その教義を自己の身に引き入れて、一心専念弥陀名号と云う自己意識の発動、云い換えれば信仰の主体を人間の側に置く立場において達せられるものと思う。

註

- (1) 辻善之助、家永三郎、田村円澄氏等
- (2) 椎尾弁匡、大野法道、阿川貫達氏等
- (3) 教行信証「選択廻向之真心、利他深広之信樂、金剛不壞之信心」
- (4) 高木宏夫著「日本の新興宗教」
- (5) 無量壽經下卷、偈文
- (6) 勅修御伝第二十一
- (7) 勅修御伝第二十一
- (8) 勅修御伝第二十七

子^ね年^{どし}史談



昭和五十九年は干支^{えと}の上から甲子^{きのとね}にあたり子^ねの年^{ねず}、鼠^{ねず}の年といえます。鼠は多産系の動物、大黒天のお使いであることから、子年^{ねどし}は繁栄の年、商売繁盛の年、豊年の年と昔からいわれてきました。

時間の上で子^ねの刻^ねというのは、午前零時又は午後十一

時から午前一時までの二時間をいいます。子^ねは方角の上では北をいいます。

子^ねは十二支の最初。十二支は中国では古い時代から、暦、時間、方角などに使用されてきたのがわが国に伝来し、正倉院御物の中に取材されています。

ほそ だ りゅう ぜん
細 田 隆 善

(東京・江東区勢至院住職
雅号・豊明)

子を「ね」と読むのは十二支だけ、子の字は幼児が手を動かしている形から出来た象形文字に由来し、「生み、ふやす、育てる」の意味があることから、十二支の最初の鼠にあてられました。十二支に動物を配するのは、だれにでも解り易いからです。

鼠は種類が多く世界に分布し、ハツカネズミ、クマネズミ、ドブネズミが多い。日本にいる鼠は人口の三倍、この鼠が一年間に食べる食糧は米に換算すると百万トンといわれています。鼠は繁殖率がきわめて旺盛、二カ月で成育し一回に八匹前後出産、年に数回出産します。数が急速に増えることを鼠算ねずみざんといいますが、鼠の繁殖率の高いことに由来します。

白鼠しろねずみは古来珍らしいもの、目出度いものとされてきました。又白鼠は福の神大黒天のお使いとして商売繁盛の民間信仰を高め、よく働く人を白鼠といいました。大黒天を祭る社寺で出す鼠の絵馬は、白鼠に限られています。神亀三年（七二六）から寛平九年（八九七）まで七回、白鼠が各地から献上されたことが記録されています。

古事記に大国主命と鼠の話があります。須佐能男命すさのおのりことが野に鳴鏑なるかきの矢を放ち、大国主命のにその矢を探すよう

命じました。大国主命が野に分け入って矢を探すと須佐能男命は草を焼いて焼き殺そうとしました。そのとき鼠が出てきて炎に囲まれた大国主命を地下の洞穴に案内して助け、鼠が矢を探し持ってきて大国主命に渡ししました。この縁起から鼠が大国主命のお使いになりました。のちに仏教の大黒天と大国主命が、大黒と大国「ダイコク」と同音であることから習合しゅうごうしました。神社に祭ってある大黒天は大国主命、寺院に祭ってある大黒天は仏教のマカカーラ天です。

薬師如来十二神将に子の神があり頭上に鼠を乗せています。子年生れの人の生涯の守り本尊は千手観世音菩薩です。奈良の唐招提寺、東大寺、興福寺にはそれぞれきわめて大きい国宝の千手観音が安置されています。

万葉集、古今集、新古今集などには鼠を詠んだ歌がありません。鼠がいなかったわけではありませんが、鼠や鴉は歌の材料にするものでないとされていたからです。ところが夫木和歌集に土御門院の鼠の御製があることは珍しいことです。

世をしのぶ心のうちのあなねずみ

やすくいづべき道もあるらん

土御門院

冬枯れの草葉に騒ぐ日のねずみ

昨日は今日になるぞうれしき

土御門院

俳句は庶民の生活の詩であることから、鼠に取材した句は少くありません。正月三ヶ日に鼠が出ることはめでたいとされ、「嫁が君」といい、俳句の季題になっています。芭蕉の句に次の句があります。

餅花やかざしにさせる嫁が君

芭蕉

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり

芭蕉

雀子と声鳴きかはす鼠の巢

芭蕉

花にねぬこれもたぐいか鼠の巢
子の日しに都へ行かん友もがな

芭蕉

昔、甲子の日に祭りを行い、子待講、甲子講といいました。甲子祭りは講中の人や村人が集まり、大黒天を祭り、豆、黒豆、二股大根などを供え、福徳円満、五穀豊

稷を祈り、飲み食い談話をし、処によって一夜夜明しをしたものです。甲子という文字を刻した石塔が各地に残っているのは、この甲子講中の人たちが建立したものです。一年の最初の甲子の日を初甲子、初子の日といい俳句の季題であり、今年は一月三十一日です。初子の日に平安朝時代、貴族たちは小松引きの行事を行いました。扶桑略記に寛平八年（八九六）正月六日、宇多天皇が北野雲林院に行幸し小松引きされたとあります。

芭蕉の紀行文に甲子吟行があります。芭蕉は貞享元年（二六八四）八月、千里を伴って深川芭蕉庵を出発、各地を回り、翌年四月深川芭蕉庵に帰った九カ月の旅の紀行文です。その年が甲子の年であったのでこの書名があるが、「野ざらし紀行」ともいいます。その最初の一節。

「千里に旅立ちて、路糧を包まず、三更月下無何に入る」と言ひけむ昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋を出づるほど、風の声そぞろ寒げなり。

野ざらしを心に風のしむ身かな



—子年(ねどし)生まれの人の生涯守り本尊、千手観世音菩薩
(国宝・唐招提寺蔵、千手観音の代表仏、高さ536cmの巨像)—

芭蕉が元禄二年（一六八九）奥の細道の旅に出で、六月二十七日越後路の鼠の関を越えました。その一節。

鼠の関をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の国一ぶりの関に到る。此間九日、暑湿の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず
荒海や佐渡によこたふ天河

鼠が関は念珠が関ともいい、山脈が日本海に迫って断崖となり、鼠が餅を食いかじったようになっていてこの名があり、現在の山形県西田川郡温海町です。

東京渋谷区の祥雲寺墓地に珍しい鼠塚があります。古来たくさんの鼠が殺されたのでその供養のために明治三十五年四月建立された三メートルもある巨碑です。つぎの歌が刻まれています。

数知れぬねづみもさぞなうかむらん
この石づかのおもきめぐみに

鼠が十二支の最初になったのは次の説話からといわれています。年の暮に神が元旦の朝新年の挨拶に来るように動物たちに申し渡しました。そして一番早く来たものから十二番目まで順序によって一年づつ動物の大將にすることを約束しました。猫は神のところにいく日を忘れたので鼠に聞きました。鼠は勝ちたいために一日遅れた日を猫に教えました。牛は歩くのが遅いからほかの者より早く出発することにして前の日暗いうちから出かけました。このことを知って鼠は牛の出発する寸前、牛の背に飛び乗りました。それを知らない牛は社前に着くとまだだれも来ていません。門が開いたとき鼠は牛の背中から飛び降り、かけつけ一番乗りをしました。そのため牛は二番目になり、そのあと虎、兎、竜、蛇、馬、羊、猿、鶏、犬、猪の順に勝負がきまりました。ところが猫は遅れて十二支の中に入れませんでした。以来鼠をうらみ、鼠を追い回すようになったといえます。

鼠は人間生活に悪いことをして損害を与えます。斉藤茂吉の歌に次の鼠の短歌があります。

壁の中に鼠の児らの育つをば

日ごと夜ごとにわれ悪みけり

しかし鼠は一つだけ役にたつことがあります。蒔絵の下絵を透明漆で描きますが、羊毛などの筆で描きますと筆がすぐかたまってしまいます。鼠の背の毛で作った筆だけが漆はかたまらないそうです。ところが都会に住んでいる鼠は背の毛がビルや下水道のためすり切れて、だめ。鉄骨を使用した船の鼠も毛の先が尖っていないから使えない。今は琵琶湖の木造船に住んでいる鼠の背の毛を使用しているとのことあります。

動物の中で共喰いをしたり同類を殺し合うのは鼠と人間だけであると動物学者はいます。ライオンや虎も同類を殺したり食べたりはしません。鼠は食べ物がなくなると仲間を食い殺します。幼な鼠をとって食べます。人間は万物の霊長といって高い文化をきずいて地球に君臨していますが、鼠と同じように戦争をして殺し合っていることは残念なことです。

鼠浄土という童話があります。農夫が握り飯を用意して畠で働いていました。お昼になって弁当を開いたが、

握り飯が手から落ちて転がり鼠のいる穴に落ちこんでしまいました。握り飯を追っていくと鼠の穴に入ってしまった。鼠は握り飯を貰ったと思って大歓迎、そのお礼に農夫をもてなしました。「猫さえおらにや鼠の世盛り」と鼠たちは歌って踊ってもてなし、農夫は土産まで貰って帰りました。隣りの欲深い農夫がこれを見て、その鼠の穴に入りました。その農夫が猫の声を出したとき、その穴が崩れ落ち埋ってしまいました。

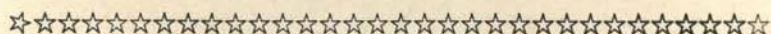
鼠小僧次郎吉は江戸末期の盗賊、身軽いところから鼠小僧といわれました。東京墨田区の回向院に墓があります。天保三年（一八三二）捕って処刑されましたが、小説、芝居などに取材されて有名になりました。

初甲子手書きの絵馬の白鼠

豊明

◎読者の皆様のご紹介を!!

小冊子『浄土』は、第五十巻目に入り、遅々として月刊誌としての活動をしています。どうか愛読者として一人でも多くの人々に広めて行って下さい。



(涅槃)

(樂)

(會)

(隨)

(想)

釈尊の「最後の旅」に思うこと



さかの
野の
泰たい
巨きよ

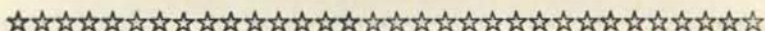
(茅ヶ崎市西蓮寺住職)

二月十五日は涅槃会である。

わが国では、古くからこの日を釈尊入滅の日として各寺で法会をおこなっている。

私の寺でも、二月一日より本堂に涅槃図の

軸を掛けてご供養をする。昔から涅槃会には「遺教経」を読誦するのがならわしとされているが、私は、釈尊の降誕会にも、成道会にも、またこの涅槃会にも、元祖法然上人の



—涅槃図（野生司香雪画）—

「登山状」を拝読し、お念仏を
称えることにしている。

この法会は、残念ながらどの
寺でも低調のようである。

近年、私の寺では檀信徒がつ
どう月例会にあわせて、涅槃会
を併修している。

心の安住せるかくのごとき
人には

すでに呼吸がなかった。

欲を離れた聖者はやすらい
に達して

亡くなられたのである。

ひるまぬ心をもって

苦しみを耐え忍ばれた。

あたかも灯火の消え失せる
ように心が解脱したのであ
る。

釈尊が完きニルヴァーナ（完全な涅槃）に入られたとき、アヌルッダ尊者はこの詩を詠じたとき、『大パリニッバーナ経』は伝えていく。

釈尊の入滅前後の最後の旅を伝える經典は九種あると言われている。

ここでは『大パリニッバーナ経』（パリリ本・第二六の経）をとりあげてみたい。

『大パリニッバーナ経』は、パリ（円かな、完全な）、ニッバーナ（涅槃）、パリニッバーナ（涅槃に入る、般涅槃）となり、特に頭に大がついているのは釈尊の入滅だからである。よって「大般涅槃経」と訳すことができる。

すなわち、アヌルッダ尊者の前記の詩のごとく、「完全な涅槃に入られたお経」ということになる。

「完全な涅槃」という以上、完全でない涅槃があるのかという理屈が成り立つかも知れない。

ない。

ごぞんじの通り、涅槃には「有余涅槃」と「無余涅槃」とがある。

「有余涅槃」とは、釈尊が成道によって涅槃に入られたが、まだ肉体がのこっているもので、完全でないことを意味している。「無余涅槃」は、入滅により肉体もすべてなくなつて「完全な涅槃」に入られたということである。釈尊は肉体があつたからこそ、教化の旅をつづけたのである。そして、肉体があつたからこそ、病気にかかり、その苦しみ痛みをうけなければならなかつたのである。

『大パリニッバーナ経』は、

わたしはこのように聞いた。

あるとき尊師は王舎城の鷲の峰におられた。……

にはじまっている。

八十才の釈尊は、王舎城を出て最後の教化の旅に立たれた。ナーランダへ行き、バータリー村へ、そしてガンジス河を渡って、コーティ村、ナーディカ村に行き、八法の鏡／＼という教えを説いた。

そこから商業都市ヴェーサーリーに行かれ、遊女アンババーリーの林に住まわれた。さらにベールヴァ村で雨安居（雨期の三カ月間、定住しての修行）に入った。ベールヴァ村は、小さな村落であったため、釈尊とアーナンダはその地にとどまったが、修行僧たちは食糧難をのりこえるために、あえてヴェーサーリーにもどらせ、知り合いの家々に分散して雨期をすごさせた。

このとき、釈尊は「恐しい病いが生じ、死ぬほどの激痛がおこった」が、「心に念じて、よく氣をつけて、悩まされることなく、苦痛

を堪え忍んだ」のである。
やっと回復した釈尊は、

「アーナンダよ。修行僧たちはわたしに何を期待するのであるか。わたしは内外のへだてなくことごとく法を説いた。完き人の教えには、何ものかを弟子にかくすような教師の秘密はない。……わが齡は八十となった。たとえば古ぼけた車が革かわひもの助けによつて、やつと動いていくように、恐らくわたしの身体も革ひもの助けによつてもっているのだ。……この世で自らを島とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」

と、自灯明・法灯明を説かれた。

すでに覚悟の釈尊は、あらかじめアーナンダに、また修行者たちにも「これから三カ月すぎたのちに、修行完成者は亡くなるであろう」と自己の死を予言している。

釈尊は、「ヴェーサーリーを見る最後の眺めとなるであろう」と言われ、バンダ村へ、ハッティ村、アンバ村、ジャンブ村、そしてボーガ市にとどまったあと、バーヴァーに行き、鍛冶工の子であるチユンダのマンゴーの林にとどまった。

そこでチユンダの供養した「きのこ料理」を食べられたとき、激しい病いがおこり、赤い血がまじりであるほどの下痢をされた。

中村元氏は、「スーカラ・マッダヴァ」を「きのこ料理」と訳されているが、「柔らかな野豚の肉」料理との説もある。

釈尊は死に至るほどの苦痛にもかかわらず、クシナーラーへ出発された。カクッター河を経て、ヒラニャヴァティー河の彼岸にあるクシナーラーに着き、サーラー双樹の間

に、上衣を四重にして敷き、頭を北に向けて、右脇を下に、足の上に足を重ね、獅子のごとく横になって、正しく念い、正しくころをとどめていた。

そのとき、サーラー双樹が花をつけて満開となり、白い花が咲き、釈尊を供養するために、花びらが釈尊の体の上にふりそそいで、あたりは真っ白になったという。

釈尊は、遍歴の行者スバッダを出家させ、最後の直弟子とした。

やがて、釈尊は修行僧たちに最後のことを告げた。

「もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成なさい」と。

そして釈尊は、禅定のさまざまな段階を経て、完きニルヴァーナに入られたのである。

釈尊は、マッラ族の人々によって、「世界を支配する帝王の遺体を処理するのと同様のしかたで」火葬に付されることになった。

七日目、「尊師の遺体を新しい布で包ん

だ。新しい布に包んでから、次に打ってほごされた綿で包んだ。打ってほごされた綿に包んでから、新しい布に包んだ。このようなかたで五百重に導師の遺体を包んで、鉄の槽で覆い、あらゆる香料を含む薪の堆積をつくら、導師の遺体を薪の堆積の上にのせた」のである。

釈尊の臨終にあえなかった尊者大カッサパ（大迦葉）が、五百人の僧とともに到着してから、火葬に付された。

そこで、釈尊の遺骨（舍利）は八分された。それぞれに分配されてストゥーパ（舍利塔）に安置された。そのほか瓶のストゥーパと、灰の塔とが建てられたとのことである。

仏滅後一〇〇年ごろ、アショーカ王によって釈尊の遺跡を顕彰して石柱が立てられ、また八塔の仏舍利はさらに細分され、八万四千のストゥーパが建立された、と伝えられている。

る。このように仏舎利の分配とストゥーパの建立は、仏教の布教と信仰形態に大きな役割を果たしたことがわかる。

また、釈尊の入涅槃の様子を表現したものと、国立京都博物館の中野玄三氏は「インドにはガンダーラの浮彫をふくめた彫刻が多いが、日本では釈尊の生は彫刻で誕生仏を死は絵画で涅槃図がつくられているのが特徴である」と指摘している。

『大バリニッバーナ経』を読んで感ずるのは、「釈尊の最後の旅」とは何を意味していたのだろうかということである。言うまでもなく、経題が示すごとく「完全なニルヴァーナ」に向っての遊行であった。

人の話によると、王舎城からクシナラーラまで三百キロもあるという。八十才の釈尊にとって、この旅は体力的にも無理があったのではなからうか。それなのに、『大バリニッバーナ経』には、釈尊が老衰の身で大衆教化に努められた様子が詳しく記されている。

バーヴァー村で、あの苦しい病いにもかかわらずクシナーラーへ急がれた。あれはなぜであろうか。故郷カピラ城をめざしての旅だったからではなからうか。

「マヌ法典」は、古代インド人の生活を知る上で参考になる。住期（アーシュラマ）の面からみると、人の一生涯を四期に分けている。再生族と呼ばれる階級の者は、学生期、家住期、林棲期、遊行期を順次に修めるものとされている。特に遊行期は各地を托鉢行脚して、供養をうけながら伝道をする時期である。釈尊もそれにならっていたのであろう。

法然上人の最後の旅についても考えてみたい。空也や一遍も遊行の旅をした。水戸黄門のような老後の旅もある。人はそれぞれに、それぞれの人生の旅をして去っていく。

私自身の最後の旅となる老後の設計は涅槃図の前で考えてみたい。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B6判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

◎子供たちのやさしく、すこやかな成長を願って、大人たちからのすばらしいプレゼントにご利用下さい。

大 道 社

東京都千代田区飯田橋一―一―六

電話〇三(二六二)五九四四 東京一―八二四七

◇◇◇ “浄土句集”欄への投句のお願い

— 及び俳文等の寄稿のお願い ◇◇◇

『浄土』誌本文中のオアシスともいうべき、“浄土句集”欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この“浄土句集”欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しく願います。

一、内 容 俳文、句会便り等の随想

一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度

一、締 切 毎月五日

法 然 上 人 鑽 仰 会

寄稿

執着

人間は生まれてきたものであるから、遅かれ早かれ死んでいかねばならない。

仏典の中にも「およそ世界のどこにいても、死の脅威のない場所はない」とある。

死を怖れることは何人も同じであるが、ただ死に対する関心の度合いが違っている。

死のことを考えない人、つとめて忘れようとしている人、自分にはまだ死は来ないだろう。まさか、そう急には死ぬまいとして、死を見つめるのを好まぬ人等、いろいろある。ものごとを単純に考え、受けとることができる性格の人は、処世において気が楽であるかもしれない。

い。

死後の世界は存在するのか、ないのかは科学的にも確かめようがない。原始仏教の聖典には、死に関する教えが実に沢山説かれている。我々人間は老い、そして死に向って進み、やがて滅びていく。

死は理論的には全くわからない。謎であるが、死を怖れ、それにこだわり続けているだけでは救われない。

こだわることは執着であって、仏教では最も嫌うところである。

皮膚癌と診断されてから十年近くも苦悩された宗教学の岸本英夫博士は、この想像出来ないお苦しみであった。

吉田 勇之助
よしだ ゆうのすけ

生への執着を「生命飢餓」、「死は生命に対する別れのとき」と申された。一般にはとても達し得ないご心境である。

良寛和尚のお言葉に、「……死ぬる時節には死ぬがよく候……」というのがあるが、これも亦普通のものの容易に到り得ぬ境地である。

「煩惱の矢を抜き去って、こたわることなく、心の平安を得たならば、あらゆる憂いを超越し、憂いなき者、安らぎに帰した者となる」。これは、永い苦しいご修行の後、生老病死の苦悩を超脱し、発見された仏陀釈尊のお教えである。

釈尊は「わたしは、ただ道を教える者なのである」と申されている。

導師としてお示しになる境地は、すばらしいものであるが、そこに到るには絶えざる精進がともなわなければならない。決して容易なものではない。

人間は死後も存在するかどうか等、苦なる人生の解決にならぬような論議に耽ることを、釈尊は戯論として戒めておられる。

善悪いずれとも断定しない「無記」のものとしての

考えであつたからなのだろう。

我々は死ねば、大きな生命の流れに戻り消えていく「泡沫」のようなものと、自分なりにうけとってはいるが、どうも力強いなにかがともなっていない。

よく知られているわが国の古典文学の書「徒然草」の著書、兼好法師は、その三十九段に、法然上人のお言葉を感動してとりあげている。その一つに「……」又、うたがひながらも念仏すれば往生す」ともいはれけり。これも又たふとし……とある。

無双の学僧法然上人が申されるこういうお言葉とか、往って生まれるという「往生」のお教えに接すると、その意味するところが少しづつのみ込めてくる。

極めて平易な表現であるだけに却って、心がなごみ、深く感じ入ってしまう。

自分のはからいや、小賢かしい考えを捨て、常に仏を念じつつ、大自然の理法にもとづいていく時に、心の安らぎの境地へ往って生れる。こたわりを少しづつ越えることが出来るのではなからうか。

放逸であつてはならないと思つている。

浄土句集

一田牛畝選

福岡 服部 光代
熱き茶にしばし晴待つ時雨茶屋

評 時雨止む迄茶屋に雨宿していると熱い茶が出された。すすっていると何時の間にか晴れて来た。

福岡 青柳 良巖

時雨るも御堂は念仏の浄土かな

ある。

福岡 安藤平次郎

晩秋や日ごと離さぬ体温計

面影の臉に浮び十夜諷誦

福岡 権藤みきを

評 お寺詣での途中は時雨れて心も寒かったであろうが、本堂に入れば皆木魚たたいている。そしてお念仏を声高らかに称えている。全く浄土の有様で、温い気持ちがいっぱいとなって、何とも言えぬ気持ちになる。

評 十夜諷誦は前文は無常、後文は悲嘆の文で綴られている。その間に、死者の氏名、年齢、戒名等を入れて御回向するのである。その風誦回向の文を聞いて、死者の面影が関係縁者には臉に浮び有難いものである。

評 晩秋ともなれば日一日と寒くなって来る、そして風邪も流行る。体温を毎日計らねば気が休まらぬらしい。

京都 岩井 伏水
散りやまぬ紅葉となりし祖廟かな

福岡 原 敬二郎
福笹を挙げて会釈の芸者衆

評 東山一带は紅葉となつた。この山に包まれ在す祖廟のあたりも紅葉散りやまぬ秋となった。紅葉を肩に合掌している人の姿は尊いものである。

東京 新井 新生
三門に佇てば枯葉の風が吹く

評 博多の十日戎はまことに盛んである。賽者は、福笹を土産に買って帰るのである。芸者も連れ出って大勢詣るが、福笹を挙げて馴染のお客に会釈しているの

評 三門に佇っていると枯葉の風が吹いて来て広々とした山門を吹き抜けて行く。街中にこんなよい気持ちの所があるのか

を挙げて馴染のお客に会釈しているの

と思わず心安らぐ気持ちになる。

東京 吉田ゆきゑ

六十年耐えし柱や冬日和

東京 細田 初枝

新薬の香やみちのくの薬人形

福岡 荒牧 浄海

供華の菊香たく程に匂いけり

福岡 荒牧 亀齡

石仏の袈裟の如くに葛紅葉

山口 上野 明達

京の秋地図を便りにめぐりけり

長野 友瀧旋風子

明け方に蔽ちり込む池静か

三重 山田 歌甫

我老ひしあなたまかせの年の暮

三重 森 静枝

聴聞のうなづき合える十夜衆

福岡 上滝津弥音

葛紅葉の袈裟かけ在す風化仏

群馬 島津 か寿

炉に招ず馴染みの簪売りの来し

広島 皆本浅次郎

墓掃除終りし樹蔭蟬しぐれ

熊本 山崎遣迎子

客迎う坊に秋晴れたまわりし

熊本 山崎 石庭

菊育て句心育てゐる余生

熊本 山崎 松子

落葉掃くこともころの糧として

山梨 青山富貴江

何もかも忘れ一服日向ぼこ

福岡 前田 秀峰

秋の蚊に客僧一夜なやまさる

東京 真野よし子

秩父路へ続ける道や草紅葉

東京 田中 秀代

いづこにや鈴振るちちろ耳にふと

東京 栗原やえ子

つゆ草の品よくやさし母憶ふ

東京 末常てる子

久し振り散策快適秋日和

東京 猪瀬 幸子

秋麗の湖一鳥の低く飛ぶ

東京 小笠原香祥

降り昏れて木犀の香にふと気づく

雌に魚鱗の相涅槃像
一田 牛畝

引き揚げ船「江の島丸」

木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}
(随筆家)



あれから、もう三十八年が経つ。

毎年暮になると、私のところへ「江の島丸会」から、会合出席の諾否を問う案内状が届く。出席可能な限り私は出ているが、実は私はこの会に直接関係はないのである。私の父をご存知の方々と一年に一回お会いして、終戦直後の父の生き様の一端でも掘めるのではないか、あの事件が父の運命を、考え方をどう変えて行ったか……そんなことを知りたいのと、出席することが父の供養になればと思うからである。

引き揚げ船「江の島丸」触雷沈没——こんな記事が当時のタブロイド版の新聞に載ったかどうか、もし載っていたとしても多分見過ごしたことであろう。私の記憶には全くない。

私の父はその船に、帝人から中華人織という国策会社へ出向した人たちと乗り合わせていて、九死に一生を得たのである。

「江の島丸会」というのは、その時救助してくれたアメリカの貨物輸送船ブリバード号の船長、ジョン・エリオット氏に感謝すると同時に、生死を共にした会員相互の親睦をは

かる全国的組織なのだが、現在は東京近辺に在住する会員の新年会といった趣である。

では「江の島丸」遭難の模様を梅原保平氏の手記から再現してみよう。

昭和二十一年一月二十二日、午前六時半、呉淞（ウースン）を抜錨した輸送船「江の島丸」（七八〇〇トン）は、上海からの引揚げ者約四三〇〇名を満載して、午後三時過ぎには、揚子江の本流から東シナ海へ出ていた。戦時中に造られた船で、時速八ノットと船脚は頗る遅い。右手遙かに舟山列島の島々が見えているが、海面はまだ黄濁しており、海が海本来の青さを取り戻すには、いましばらく時間がかかりそうであった。風は身を切るように冷たいが、冬の東シナ海にしては珍しく穏やかで、船艙のいきれを避けて甲板に出ている人もかなりいた。私の父もその中の一人であった。帝人関係の仲間四人と手摺にもたれて、薄れ行く大陸に目を当てて、

「これが大陸の見納めですか」

「二度と来られるとは思えないね」

「考えてみると、この六年間、我々は何をして来たのだろ」

「スフを造るつもりが、燃料用のアルコールを造らされたり……」

「拳句の果てはこのさまだ」

というようなことを話していたそうである。午後三時五十分、突然船体を揺るがす大音響と共に、船尾に太い水柱が立った。

「触雷した!!」

甲板にいた誰もがそう思って顔を引きつらせた。いくら航路の機雷は除去されたと言っても除去しきれぬものでなく、米軍が敷設した機雷原の上を、船はおっかなびっくり航行

していたのである。機雷は磁気機雷というやつで、これは艦船が近付くと浮上してくる厄介な代物であった。船の速度が速ければ躲すことも出来るが、「江の島丸」のような低速船は、恰好の獲物であったと言つていいだろう。

船艙内には塵埃が立ち籠め、忽ち阿鼻叫喚の坩堝と化し、我先に出口へ殺到した。

「そりゃもう、ひどいものでしたよ。しかし当時は秩序というか、順番を待つ訓練が徹底していたから混乱は一時的なもので、割合スムーズに甲板へ出られましたよ。いまあんな事態が起これば女子供は踏みつぶされて、多くの庄死者が出たでしょうね」

と、後年私に語ってくれた人がいるが、頷ける言葉である。

その時の有様を梅原氏は次のように記している。

……いきなり娘の手を引張つて、急ぎ甲板上に駆け上る。船尾の沈下を見て、先ず船がどんな状態にあるか、近くに島はないか、船影はないか、を見ていたところ、船尾が幾分沈下しているので沈没は免れないと感じたが、このまますぐ沈むとも思えないと即断した。舟山列島の一部とおぼしき島が遙か遠くに小さく見えるのみだ。頭を回すと、遙か遠方を貨物船らしき一隻と、その左側遠くにLST三隻が先航しているのが見えた。あの貨物船が来てくれれば、或は一部は救助されるかも知れないと、神頼みの気持で娘に気休めを言う。(中略)どの位の時間が過ぎたのか、ざわめきが一層激しくなった。気がつく、先刻見えた貨物船であろうか、大きな船が我々のいる反対側の左舷に横付けせんとしている。聞けばアメリカの貨物船ブルーバード号とのことだ。(後略)

梅原氏の祈りは神に通じたのであった。

「どの位持ちそうか？」

エリオット船長の問いに、

「一時間は大丈夫だ」

実際は三十分持つかどうかという状態だったが、「江の島丸」の加藤船長は咄嗟にそう答えている。この答えがエリオット船長に危険極まりない救助方法を決断させた。

「OK」

エリオット船長は敢然と舷を寄せて横付けすると、船首と船尾をロープで固定し、両船の間に何枚もの板を渡して、先ず幼老婦女子から収容した。一見何でもない方法のようだが、海難史上空前の危険性極まりない救助方法だったのである。下手をすると、沈没船に引き込まれかねないからである。しかし、この無謀とも言える措置が四三〇〇名近くの命を救った。収容に要した時間は三十分位だったと言う。触雷時に爆死した人十三名。その他接舷時に跳びそこねて海中に落ちた人が数名とも相当数とも言われているが、はっきりした数は判っていない。

「救助作業中、日本人の態度は立派だった。泣いたり喚いたりすることもなく、私の命令をよく聞いてくれました。あの時、もし日本人乗客の冷静な協力がなかったら、救助作業は失敗していたに違いない」

後にエリオット氏はこう語っているが、梅原氏は、

「吾れ勝ちにと先を争う様は本当に情ない程醜いものだ。しかし踏板一枚渡るか渡らないが生死の境ともなるやも知れないのだから無理もない」

と、正反対のことを書いているが、どちらも真実であろう。しかし混乱はあったとしても、三十分程の間に四三〇〇名近くが移乗出来たということは、昼間であったこと、海が

静穏であつたこと等を考え合わせても、奇蹟に近い。エリオット船長は更に、

「まる一昼夜日本人がスシ詰めで過ごした船艙にはチリ一つなく。掃除までしてあつた」まさに飛ぶ鳥跡を濁さず——である。梅原氏の手記によれば、清掃班を組織して船内隅なく掃除したとのことであるが、エリオット船長はそういう日本人の姿にいたく感銘したと語っている。

このエリオット氏を探し求める人たちがいた。が、正式名ブリバート号をブルーバード号と誤認したため、なかなか手懸りが掴めず、ようやく探し当てた時は十七年の歳月が流れていた。

昭和三十八年、エリオット氏は既に退役して、サンジエゴで悠々と自適の生活を送っていた。「江の島丸会」は早速エリオット夫妻に來日を要請した。十月十五日、夫妻は軍用機で厚木に飛來し、名所古蹟廻りやテレビ出演、秋の園遊会出席等々、多忙な数日を過ごしたのであつた。この時、日本政府は勲三等旭日中綬章を贈って感謝の意を表している。

昭和四十五年一月一日、父が他界してから、**「江の島丸会」**の案内状は私のところへ来るようになった。

この年の九月十九日、エリオット氏逝去。享年七十。海軍葬で手厚く葬られたという。エリオット夫人と親しくするようになったのは、四十七年四月、彼女が單身來日された時以来である。その時NHKの「スタジオ一〇二」に「江の島丸会」のメンバーと一緒に出演したが、時間が押して、三分程度の顔見せで終ったしまったことが関係者には大いに不満だったようなので、フジテレビの友人に頼んで、強引に「三時のあなた」にコーナーを作ってもらった。ラジオ局の一プロデューサーとして、出来ることといえばその位のこ

としかなかったのである。

昭和五十一年九月、娘のサンジエゴの高校への留学が決まった。その旨を夫人に報せると、折返し歓迎するという返事が来た。留学の手続旁々、サンジエゴまで娘を送って行き、その時四年ぶりで夫人と再会した。当時のメモを繰ると、

——九月九日（木）エリオット夫人訪問。はからずも父の写真と対面す。万感胸に至る。とある。応接間にはいると、壁に勲三等旭日中綬章と日本政府の感謝状が飾られており、その横に「沈没二十年」と書かれた寄せ書きと写真が張られていた。帝人関係の五人は「沈没会」と称して、毎年一月二十二日の夜集まって歓を尽くすが、年中行事となっていた。昭和四十一年か二年の会合と思うが、父のみならず、どなたの顔も若々しかった。（メモの続き）お茶をご馳走になったあと、夫人の運転する車でエリオット氏の墓参に赴く。「夫の名誉を誇りとし、夫への愛に生きている」という夫人は、とても七十二歳とは思えない。四万数千の将兵が眠る軍人墓地のほぼ中央に、エリオット氏の墓石は立っていた。宗派の紋章と氏名、出身地、生年没年の月日、従軍した戦争名が刻まれた簡潔な墓石である。花束を捧げて冥福を祈る。

それぞれの思ひの中に秋澄めり（後略）



その後、エリオット夫人には会っていない。クリスマスカードの交換は続いているが、なぜか去年は届かなかった。夫人も今年は八十歳である。何事もなければよいのだが……。

身寄りのない人だから、余計気懸りである。

（終）

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

新年早々『浄土』誌の遅配と相なりましたこと、まことに申し訳ありません。

どうか今後ともまた、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、新登場の小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきますいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm × 30 cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm × 50 cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵が、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字用紙八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十巻 二月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十九年一月二十五日 印刷
昭和五十九年二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

＜『浄土』誌連載にされた大長篇歴史小説＞

待望の本格八仏教／歴史巨篇！

毎日新聞社から好評のうちに全五巻発売中！！

念佛ひじり三国志

―法然もわづろく―

寺内大吉 著

四六判・上製 全五巻 (各巻定価一三〇〇円 丁各二五〇円)

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成

香り高い歴史ロマンの超大作

第三十七回 毎日出版文化賞受賞

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一
振替(東京) 四一五六五三四